

自閉症で公務員の青年がいます。その母、明石洋子さんの《講演と対談》が今年四月、京都市内でおこなわれました。

「TEACCHプログラム研究会関西支部」の例会で百五十人が参加。二十五年の母子の歳月に拍手しました。明石さんの話は家族・地域・雇用・施設など、さまざまな分野での課題を示唆しています。知的障害者の雇用については、七月一日から改正法が施行されました。旧来の身体障害者の雇用促進に関する法律に、精神薄弱者の雇用義務が課せられたのです。

講演のテーマは「重度自閉症児の豊かな人生を求めて」。

京で「TEACCHプログラム研究会」例会

明石洋子さん母子、25年の歩み



明石洋子氏

社会福祉法人・全日本育成会機関誌「手をつなぐ」編集委員。「あおぞら共生会」会長。障害者地域作業所「あおぞらハウス」「ぞうさん」障害者生活ホーム「あおぞら」「ウイズ」各運営委員長。薬剤師。川崎市。長男は川崎市職員。

講演

周りの理解と工夫で自立

■ ジョブコーチがつけば働ける ■
自閉症の息子(25)の母。十二歳までは療育手帳で「重度」二十

歳まで「中度」現在「軽度」知能が上ったわけではなく、地域で生きるスキルが増えたから。

自閉症が治らない病気ならそのままでもいい。周りに理解してもらい自立できればと思育してきた。重度といわれたときは高校と

か公務員とか想像もしなかったが、周りの理解と協力で、めざましく成長し、自立した楽しい充実した生活をしている。

私は七年前、ティーチプログラムのセミナーに参加して、ジョブコーチ(仕事をサポートする人)がいれば働けるという自信を持った。息子は川崎市の公務員に合格後、採用までに一年半かかった。受け入れる職場がない。人事担当も対応が分からない。そこで、それまでにティーチを学んだ市の職員に呼びかけ、十四人で月一回勉強会を重ね、そのうち四人がジョブコーチを希望した。そこで市と話しあい、ジョブコーチ付採用にこぎつけた。一カ月で仕事を習得。環境局で四年九カ月働き今春、異動した。

■ 自閉症の公務員がんばる ■

一昨年、私が担当して、全日本育成会(知的障害者親の会)の情報交流誌「手をつなぐ」九月号で公務員雇用の特集を組んだ。総務庁の勧告で知的障害者義務雇用の

特別企画

自閉症

豊かな人生を求めて

■ 講演と対談 ■



明石さんの講演を熱心に聞く

法制化に近いので、全国三千三百市町村に手紙をだした。障害者を雇っていますか。結果、知的障害者は五十六人。ただし、受験合格し、ジョブコーチ付で正規採用されたのは息子ひとり。

彼は今年四月、健康福祉局に異動した。

環境の変化を好まない自閉症だから、異動に抵抗を示したが、あたらしい職場でも、一週間ジョブコーチをつけて、仕事はすぐに覚え、あたたかい環境に、すっかり

溶け込んでいる。

ジョブコーチとプログラムがあれば、自閉症でも働けると、自信をもってお話できる。

■地域に育ち地域に生きる■

私が子をどう育てるか。子の幸せを考えると、施設が必ずしもバラ色とは思えなかった。問題行動が多く、私のストレスの元であっても寝顔がかわいい。私の元気なうちは一緒に生きて、喜びも悲しみも共有したい。たとえ重度でも地域で暮らせるシステムを作ろうと思った。地域に生きるために自立に不可欠な社会のルールは教えたい。できれば買い物、乗り物、計算。一〇〇を普通児としたら本

TEACCHプログラム

発祥は米国ノースカロライナ州。自閉症および関連するコミュニケーション障害児・者のための全州規模の総合的援助ネットワーク。一九七二年設立。「自閉症の人を内側から共感的に理解。そこから援助方法を生み出す創造的・問題解決的アプローチ」がねらい。日本では日米専門家交流を経て、一九八九年四月、研究会を発足。

人の力が五〇でも、あとの五〇は周りの理解と工夫で自立できるのではないかと思った。

ひとつの例をあげると、息子が地域の商店でアルバイトをしたとき、奇行が目立って、周辺から苦情がきた。なにしろ、水にこだわるとイレ好きで、よその商店のトイレ掃除を無断で始めて騒ぎになった。

そこで、理解を得るために「Tちゃんだより」を配った。

■周りの工夫で能力が上がる■

「耳からの情報が入りにくいので、前に回って、目を見て叱ってやってください」と対応の仕方とともに、彼をどのように育てているかを書いた。

そして彼の気持ちを代弁した。

「こんにちは。十七歳で、定時制高校三年生です。道で会ったら声をかけてください。言葉が分からないこともあるけれど、笑顔でこたえます。このB4判の「たより」が商店会から民生委員、地域の四千世帯へ。さらに福祉事務所や警察、学校にも伝わった。

学校の全校集会で読まれ、多くの中学生が、彼の勤め先の文具店に買い物にきた。「Tちゃん、Tち

ゃん」と呼ばれて、息子はうれしくてたまらない。周りが知って対応してもらえば、できることが多い。公務員でも、周りの理解と工夫で五〇の能力でも一〇〇に生きる。

■自己決定と独立宣言■

「自己決定」が大切だといふけれど、障害者が決定できる選択は極端に少ない。だから私は、アンテナを三六〇度に広げ、あの子の望みをキャッチして選択の数をふやした。選択肢を多くすることで豊かな人生を送れると思ひ努力した。地域の高校も市の環境局も本人の選択。いま彼は結婚し二児の父になりたいと言っている。

二十歳になったときは「Tちゃんと呼ばないで」と「おとな宣言」二十五歳の今度は「独立宣言」。

結婚に関しては、相手もあることで、イメージがわからない。かつて、私のストレスの元だったころは「この子がいなければ」と思ったこともあったが、いまは神様が宝物のような存在で、離れたくない。離れるのかと思うと寂しくって……。結婚のネックになるのは私かもしれない。(笑)でも一応、募集中。